

猿

義集

七部注解之四

中村俊定文庫

文庫 18

1006

13

七部集注解四
猿以表集





猿蓑集之解



仙遊の集化も事古今。ワたりていそのおりて
ねこそいふ時なれや

そは語や古なりてい古今の風俗を採り
けりなる集なりん今になづい古。佐々木とさす
おやいふこといふ事いふこと道建つ時
一書、そは集なりぬる集なりぬる集なりぬる
深くいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
りも、集なりぬる集なりぬる集なりぬる

知
仙の分りていそのおりていそのおりて

侍もも立のうのれきふに及魂の法の思ふ
うううう

西の極東抄より田舎のなまじりて花月のな
 らんと度々相違に於て骨を以て連絡して
 うけしう人の愛は似たりとも是れ心も情も
 さるゝなりあふも経書のありき一書も
 今と云ふまでこれなり都にもかくもさるゝは
 まゝつゞけをいふに此後にも満ちく
 まづさてもいふべき事こそそとあらはれし
 とよみこころをいふに酒ある舞ひの所
 いふふふお祝の御礼なりあきらめ侍まつて

西の界にそとに
 人の心にかきも
 なる
 心は魂の法に
 思ひもふ
 心は
 心は
 心は

きくを魂の入るにアイウエヲ能くする
し、心もわくは、心魂の入るに
心を連なり抑の心は、山中の様
小を、えて、神との心は

煙より表方と出さず飛降りたり
 可る位に粗の姿を認め細作の如き盡
 なるは是れ神の入たることなり
 まのはし神の姿をいふにあらず

神機妙算

ふりては何れか
ふりては

傳灯録云曰 又思女常 袈裟^ニ 澣^ス 新^ニ 賣^リ 供^ニ 朝夕^{ハツ} 居士^ニ
又思女ハ又^ニ 袈裟^ヲ 澣^シ 外^ニ 一^ツ 婦^ヲ 入^レ 衣^ヲ 列^ニ 乞^フ 玉^ヲ 醜^ク 婦^ノ こと^ヲ 能^ク
又^ニ 句^ヲ 又^ニ 衣^ヲ の^ヲ 此^ノ 袈裟^ヲ 又^ニ 衣^ヲ の^ヲ 漢^ノ 婦^ノ こと^ヲ 能^ク 又^ニ 衣^ヲ の^ヲ 漢^ノ 婦^ノ こと^ヲ 能^ク
又^ニ 衣^ヲ の^ヲ 漢^ノ 婦^ノ こと^ヲ 能^ク 又^ニ 衣^ヲ の^ヲ 漢^ノ 婦^ノ こと^ヲ 能^ク

天照女は天孫を降ろさる人を行と雷人茶の記も
 天照女も物とし人のいなりなりなり人皆也

此句也

赤柳々七栢の傳もの
神代毒飯のもの

度致の心と筆と海

なまこよつとあめさけうゑえんふんとくか屋や
りやう心もなれぬ因になるこ

枕蓆紙の詞よりわき

きんぐのふくろふくろ
たふ

香花やまゝに定ぬ
 浦風物にこそ
 入字なむとせ戸口とも
 ぬ人のふけを

矢田の野や浦のたぐれに心衛

[illegible]

是白きも此の空也の境りと空體と比合する
とて空也と此の空體と比合するは御證の如しと

人
一
家
を
買
ひ
と
く
家
に
入
る
と

此の如きの
 部

飛鳥川
刻
石
記

伊 哲

世は
まづ
し
もの
は
み
る

弱
之
法
海
高
つ
中
々
解
花

多那はを食即ち切れとを相てあふ徳のこめ板
 下はを食僧のすこ

萬々年の儲や何路社也

年毫の糸^ツ商人の用を助く

野
横
拍
門
の
中
よ
る
観

母以子貴也此古歌之

中へて、其井より水は引く
物に、いそぎよく、い

らねるゑき

好古集物ニ新古今集ニ交ニ是ノ夏ノ以ノ名ヲぬハして

初之結云新仙の一人也

東州 唐土 如國 ち橋 少くまゝ

ねまゆの露 ままといふる親

之を抄曰新仙の海に定まのつゝあはれに
増もすきなり 露のまゝといふ親より
あはれに 素更とよく 而も作 但まほありぬ
あはれに ち橋より ち橋より ち橋より ち橋より
てやうに

花水の橋 ち橋より ち橋より

母夢 訪ふ句と碑あるは水に梅なり ち橋より

名原 中 ち橋より ち橋より

ち橋より ち橋より ち橋より

豊國の神 ち橋より ち橋より

市 ち橋より ち橋より

ち橋より ち橋より ち橋より

増 ち橋より ち橋より

ち橋より ち橋より ち橋より

増 ち橋より ち橋より ち橋より

也 ち橋より ち橋より ち橋より

馬の代や葉戸等も湯で

近頃陽明の無下の神社四月廿日新嘗の祭に
女中の数も湯をいたくし

拾遺抄 上はねもたつたふとくさし
つとくさく人の湯のあし

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

いふ事候ふ所も 汗（さ）は ぬれぬの姿も一集
しとあふまふとくさくさく

源氏 弟女に 馬の代や葉戸等も湯で
いふ事候ふ所も 汗（さ）は ぬれぬの姿も一集

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

馬の代や葉戸等も湯で

存子日有所謂暢者君智之乎方國於暢之左角者曰
解氏有國於暢右角者曰樂氏時相與爭地而

室はゆるやびくくゆゑのあ
病はとあまのうまつに記のこまき

あやほくこまの母もぬのあひ

るは集いふよう信ふうまに

あきりく今もまきしるまほん

こまの母もあまきしる

りは是鹽の屋の蟻ウシカうほ

うんはま橋まきしる 蟻の都く

口の周や産つとて果つる牛の舌

山城守は京と兵庫の境一里塚のあまこ

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

こまの少神も今やちう平

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

まほんこのあまのあまき

月 餅や咽の家の藤花

月餅の神宮の山宮のあきり昇るよりやだんだん

夕 暮の丘をびたりと峰

山いの山をさくちとて

人より想もひと組秋は風

あの子をさうくたれは折れく

ひと組をさうくたれは折れく

橙花の山をさくちとて

山をさくちとて

あつてもあつても

口見の山をさくちとて

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

あつてもあつても

帝師よりつとてふに花の

ぞうとてふに花のつとてふに花の

一里を皆花のつとてふに花の

と東門のまゝのつとてふに花の
情つてつとてふに花の
何れも金花のつとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

つとてふに花の

樞戸所次轉而開開也 字彙曰戸軸也

り考ををわく

ちるををわく

殺しの如く流る川に

凡此
安邦

まゝに戸はききかへる

人主くまのふれをうけ

走

まゝくゝんはにやうくろい 唐文一百廿唐文を採るゝ清世の
もくし 句元妙也

[illegible]

書
り
く
る
は
何
れ
と
秋
を
て

邠

[illegible]

心よりやまを修

九

ありやまの ^{メリヤス} 茶本や ちよつと 祇園 寺々 人の ちよつと
 是れ 俗々 今 俗々 俗々

五

三

子

こゝ又山家年記の志す處に午の月とあるを

哥

25

砂

邠

新刊

志を以てて祈る

吸抱之先出子水泉寺

海客來

4

先上ふ御のまゐりてき後ひの人多るさまは成り
せきまよふ余情あり

ふきも虚回りの思ひなりと 邦

虚白茶を嗜み茶賦なり古又あ集りありそな
ま好なり人を虚回りと云ふなり
道なりと云ふ人こそなり茶位なり物なりと云ふて相違
者御座りては風俗の茶人の心と云ふて句のなり
と云ふ

さし木橋の月の朧衣 心

そを虚回りの思ひの橋なりと云ふなりと云ふなり
いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

さし木橋の月の朧衣

さし木橋の月の朧衣 心

さし木橋の月の朧衣 心

獨りなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

さし木橋の月の朧衣 心

さし木橋の月の朧衣 心

さし木橋の月の朧衣 心

地をくぐる人の指しおのけの物えかきしつゝ
つゝあききしつゝあききしつゝあききし

きききききききききききききききき
北

別をいふていふていふていふていふていふて
とていふていふていふていふていふていふて

きめ 梳きききききききききききききききき

思ひ切るきききききききききききききききき
邦

目のふくきききききききききききききききき
思ひ切るきききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききき
思ひ切るきききききききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

思水の水のひらひらの物あきききききききききききき
思水の水のひらひらの物あきききききききききききき

望人々長袴ゆるきたりむ

そはをとりておとすりり

よに袴意保ゆとてふ望うる

布子えき凡の夕暮

ね

押入を居るはるまじ

ね

たらのものまゝなま

おは望もきくといふはけりなす所々きくといふ

布子えきおとすのけりて押入を居るはるまじ

次ハ多良のやの丸きし 行所

一梅軒つゝ窓のそりね

ね

杉柵のちやうもつる

ね

多良のちやうもつるの神のけりて

市中いふいふやき月

北

果しとつての原

あ

市中宿腸ねる白の敷を
今世の似えきるを
法にさす五枚の敷を
白法敷の似えきるを
五枚月法敷の敷を
似えきるを
気持

服を打たしむる中
果しとつての原
市中いふいふやき月
果しとつての原
市中いふいふやき月
果しとつての原

一便打たしむる中

北

市中宿腸ねる白の敷を
今世の似えきるを
法にさす五枚の敷を
白法敷の似えきるを
五枚月法敷の敷を
似えきるを
気持

市中宿腸ねる白の敷を

北

果しとつての原

あ

市中宿腸ねる白の敷を
今世の似えきるを
法にさす五枚の敷を
白法敷の似えきるを
五枚月法敷の敷を
似えきるを
気持

市中宿腸ねる白の敷を
今世の似えきるを
法にさす五枚の敷を
白法敷の似えきるを
五枚月法敷の敷を
似えきるを
気持

九
年
松
之
詞
之
歌
石
之
細
之

孝
 子
 之
 行

the

蘇の草とくにいふ花中にも



あやうき長服をばつゝ……所の死体も一
句けの死体町の死体あり長服者の人の物曜せん
と云ふは死体をばつゝ……は死体も各の身元いふ
しもの所ある所に死体もつゝ……
……

道心ありなれば

३

旅の長尾のみに依る

ch

是心の爲をまゐらふに常に於て答ふ時に例の法は
 ありと雖も、けしきも亦無化して、路の草とて
 一の所親の句也

冬ハ作リとつて水素の安キ所を
海泊中と云ふ

魚の骨を煮てその老をえて

為

待人如門之捷

4

魚のほろきとソつとらう老神のさきものにて魚の骨
をけづるは一句のさうもや也星のほろき老をけづる
急の骨をさすは一句也妙也

待入りしわづの境とていそは成ま指花の付こ
部次方に書作し事いふく——あき境まのゑとて
古江浪作日今の境ま物語も同くいふまき日
同きつまこいふ句いふまき——花表の侍人さしは
つゝ境と境まゑといふ集候時粒ゆいの句いふて
終つてま指し境のあつてまきとれはゑのまき
まきとていふ

まかり屋風を倒もめき

北

湯殿いけのまきいけ

あ

まかり屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

けえまきくの般きとていふまきとていふ

湯殿いけのまきいけは屋風倒もいふまきとていふ

いけ屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

いけ屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

いけ屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

面香のまきいけは屋風

あ

いけ屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

あ

湯殿のまきいけは屋風はゆにはものゑたきめきとていふ

猿川の想と世と秋の月

一年にその年の想と斗ふ

猿川とは何れを言ふか
あま常はる神想のいふや
世は想のうた

辛苦と別苦樂のいふ

又唐詩選：猿馬帶禽歸
夕暮の想

年と一斗の想は
想の男の

五つが生まつて

清

思ひあふはる

此

地と斗ふは田舎の神

あまの想はちとふた

近てとふは馬の口持

此

丁持とあふ水

此

思ひあふは口持

あまの想はちとふた

一説はあまの想はちとふた

今の想の想はちとふた

戸障りも是国

此

ていぢめ守つた

此

さしも花あかりのちも打寄 玉るるなと語りし御衣
うしやをうらささいあんにて現もなほは遠く小丁経人
に彩りのほそけしするもさうなもね
天上字を唐舞のふりあふし 花をさうその玉るる
はあふさふさ

うらと多柱をいりおはし

ききうらふに初秋

うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣

うらと多柱をいりおはし

ききうらふに初秋

うらと多柱をいりおはし

ききうらふに初秋

さしも花あかりのちも打寄 玉るるなと語りし御衣
うしやをうらささいあんにて現もなほは遠く小丁経人
に彩りのほそけしするもさうなもね

うらと多柱をいりおはし

うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣

うらと多柱をいりおはし

ききうらふに初秋

うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣
うらと多柱をいりおはし 玉るるなと語りし御衣

いそがしきあそびに能く西行の流泉とていふ
されどあそびに西行の流泉とていふ
あそびに西行の流泉とていふ

五十六
 是年十一月廿五日
 付
 付

さあくよ 早登り 多 玄道にて

渡辺の早稲小所
あり

吾人のやうな婆も此を由とせ相見せしむ
忠に向ひて仕えぬ

浮世の白紙とて紙のけよ、夢の少ねとて夢を

其の如くしてある所を不習にせしむる所の意
 とはあるの梅枝の如くして流の如くおの如く
 所流して流る如くして流る如く流る如く
 流る如く流る如く流る如く流る如く

何如
辨
之
同
之
來

李長之廣平板皮

掌風 遠く 花の 後

あ
ま
の
な
か

十何の果とてより
 主心のけとて
 淵よりるも
 波とて

四目ある程に抄あるの序とて十の巻出たに祈
うきうきに抄あるの序と

よ代抄あるものゝ序とて
北

抄あるものゝ序とて
北

十の巻とて抄あるものゝ序とて
北

而も
抄あるものゝ序とて

よ代抄あるものゝ序とて
北

抄あるものゝ序とて
北

よ代抄あるものゝ序とて
北

摩耶山観音の巻とて
北

抄あるものゝ序とて
北

摩耶山観音の巻とて
北

タヤ
抄あるものゝ序とて
北

抄あるものゝ序とて
北

抄あるものゝ序とて
北

抄あるものゝ序とて
北

ろくろに油を注ぎ、
水を用いて脂多く浮く為
油燈の油に同様に

玉の
ふ
ろ
う
て
い
ま
ふ
ふ

物界より生命の体へ

かゝるそと、客とてききり、老翁のさへも、所々、
 是れ、勿論の事と變化して、もの思ふは、けう、
 此の情よりあせり

近き言ふ所なり

金鑑と人との交り
海

あふ風雪のちの月

体々しくは語をうへて述べる事には所なく
 金環のこゝろ向ふ——きつと心ねえ細いあひらつた
 活字
 あつた紙をぬかして手紙をのこす

町田の秋も又ハ明後夜

何事もあらず

花をよむに
西の空を
よむ

小舟の碇
差し去りて
多し
飛

あつた
うしろ
のさ
は

ちかき心細き水のさくらさくらと水の流る
しるしを流るる水の流る

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

さくらさくらと水の流るる

三

赤毛とてよくいふは言ひそふはふの柳也

[illegible]

信の結

四
三
二
一
七
六
五
四
三
二
一

美草花にや

[illegible]

田舎の風光よく名所多し

来

あやのきり
速

冰

吾等の如きものぞ

海

ちりきり 水と蘭の 蹴くし

此

あまの句々
かゝるの世をみるもよく
たけなひに社を
うくる御使成
東や一すきとめ
なり物受あり
まかい
まー素といふ
はて

あふ市川の川を渡るに
信じてゐる偏りした心
人の心もさうだ
おひさまはあせり

吾れと路は而にゆき
 遠き所を疾速に
 走るるを
 小男を親に
 呼ぶるを
 蘭の歌は
 是の所の歌

系樞

三

春之月 曜の空

水

[illegible]

何れ思貫楊々花をさくは花とてさへ正しく
なりけりまゝに呉味いふやぬん然ハ何をぞと花
としきやと云く是ねのうきにすおなせしむ
既よ鳴花を而負つるこ又花を春は月より初
り一衣を春心を表するものハ腸も欲知く初衣
なるものを着たりある余涙なりハ甘らんとし

—

四國よりあるは、
今に例が、
一日

花の昔よりきこせは
花の後のまじりて
つゝあふれぬ心なり
花の影もくばるる
花の影もくばるる

先師自爲居士曰我ハ夢野の詞を存すは
正しくなりたの神をいふに
あつて是れ也

一雙口

糸極の句別

考

思ひきく
思ひきく
思ひきく
思ひきく

中は

梅よりなまうこの宿のまじけ
いそひたりしききりの暖
乙州
乙州と後てはくはく二所ゆへ句端に梅を賦
御もてものかきくも句に梅もあはれまめ

て海邊をさまのしめしめけりもかきくはく
まじけりしめしめあつてはくはくはくはく
眼もつきのしめしめはくはくはくはくはく

まじけりしめしめはくはくはくはくはく
まじけりしめしめはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはく

是れはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはく

花をまにまにさしうゝまの春にさくらうはるふむふこ
のしらけりよそのゆふがーまがうゝうゝうゝうゝ
まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
てはるに花のまがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

花のまがうゝうゝうゝうゝうゝ

まがうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

秋の夕うつふ屋の蚊帳

下葉もほそくあひあつ

とれあつて秋の夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳
夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

北

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

北

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

北

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

北

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

花かきもいれ秋の夕うつふ屋の蚊帳

曹操の相手を極く詩を賦すると思ふに合ふ
かゝり細く著るるを御の神を以て

考へるに依りて神の経礼 西条

店屋の倉伏のふり 本

汗の端の羽の糸 東

別とせし 鶉の下 古

かゝり神の物なるを以て 傍の神を以て

彼を以て

伏の店屋に又ある章をうけるに也

汗拭やそと多難なるもの

は句を以て ぬ坪の鳥は別

神に見る神なる也

大膽の思ひの神なる也 城

乃の活法のともなる也 書

少の神なる 細工 所

概なる 大平の風 風

路の下とて 打はるる 大膽なる 神
物なる 沈て 活紙のともなる 風

あつたけりし我の心ありやあにけりあま
ふしけりし我の心ありやあにけりあま
ふしけりし我の心ありやあにけりあま

羊我を親の姉弟也といふ

次は職人のようにもえなまりき放蕩のくじりて
捨ぬくことなり

職人
哥合

いふもく 捨ぬくものありけりあま

抑も所もたに望みなりやあにけりあま
おろしきものなりけりあま

多許に思ふも浪塵の浦

猿籠

胸に合ふものなりけりあま

猿

いふも要るものなりけりあま

風

物に合ふものなりけりあま

紙

あまの心ありけりあまの心ありけりあま

あまの心ありけりあまの心ありけりあま

あまの心ありけりあまの心ありけりあま

賀人朴

ふふふふ 海にふふふふふふふふふふ 一句の曲節
移る色

ふふの海に 雲をふふふふふふふふふふ 一句の曲節
あふふのふふふ

雲都の海をふふ 桜はひ ち

海にふふふふふふふふふふ 凡

歌にふふふふふふふふふふ 尚葉

海をふふふ 市の割り 是邦

雲都海をふふふ人の雲をふふふ海をふふふふふふ
ふふふ海をふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふ 律をふふふふふふふふふふ 是にふふふふふふ
律をふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

律をふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ 海をふふふふ 歌水

ひなの海をふふふふ 羽紅

海をふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふ

幻作菴之記

記と賦と二題あり

石山の尖つる所を流るる山と一帯を山と云はし昔國
多寺の名を傳ふなり

江州常陸郡那賀と云ふ山をもちてなりといふ事なり
幻作菴は當時義仲寺の境内にありて國を國といふに
天竺を養老五年敕命ありて諸國を建つは是を
そひて之の稱を傳ふに云

昔の細い流るる河にありて一帯を山と云はし昔國
多寺の名を傳ふなり

一書にありて山の形を後と云ふ山の形ありて云

壯牧の詩、與客携り臺上翠微

神神の法陀解のそ像とて吐く一語も是を
もてはる能くも利をのきも一語も又

もね、の情言の如地法陀と和共光同共整略

一和光同整略と云
りひる人の法とていひて神寂解あり信ふ

位をてそんあり蓮根を形を困根も解を
て狸根肝ををけり知信庵とていひて信
の年ハ勇士の法陀由多とて信又とて信
と今ハ成年とていひて信又とて信

はるをねと云

一書、曲家通称外記 一書、知信庵老人の居所の
席中かるい席なる一書、探山居士

市大市中法とていひて信又とて信
やとていひて信又とて信

信又とて信又とて信

信又とて信又とて信

信又とて信又とて信

能因

ふねうゝ波のうねはのうね
ありきき 紙のうね

あつてふまのうね 初巻の初巻

ふねのうねはのうねのうねのうね
のうねのうねのうねのうねのうね
卯月のうねのうねのうねのうね
とて思ひのうね

まよ

ふねのうねのうねのうね

山家集

ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね

ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね

ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね

ふねのうねのうねのうね

ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね
ふねのうねのうねのうね

現

ふねのうねのうねのうね

杜氏岳陽樓登詩

昔閑洞庭水今也岳楊樓
吳楚東南圻乾坤日夜浮

東宗歸馬烟雨望我蕭湘洞庭欲興
篇舟版去故人道是丹

山と坤、時人系よるるに
南と楚峰

此處關文

家語曰南風之薰了不解我民之愠了

楚風、南の風也
少風海を浸し、枝の山は良のなる根より

嶠の移るゝ處とあり城のありし跡とあり
何ぞと云ふに通し、杜工部の

山、楚の山とあり、楚の山とあり

楚の山とあり、楚の山とあり、楚の山とあり
水鶴の如く、楚の山とあり、楚の山とあり
中にも、楚の山とあり、楚の山とあり
古も、楚の山とあり、楚の山とあり

楚の山とあり、楚の山とあり、楚の山とあり
十名の一也、楚の山とあり、楚の山とあり

楚の山とあり、楚の山とあり、楚の山とあり
山の端の

甲子山、友人、あきふき、けり、嶽多、出、峰、
嶽、く、く、く、あり

一書、後、友、ま、あ、り、と、い、ふ、は、

甲子、う、ち、に、あ、り、と、い、ふ、は、後、九、の、墓、と、

名、家、抄、と、

甲子、う、ち、に、あ、り、と、い、ふ、は、今、や、ま、の、の、墓、と、

後、九、條、院、

甲子、う、ち、に、あ、り、と、い、ふ、は、細、代、と、

甲子、う、ち、に、あ、り、と、い、ふ、は、後、九、の、墓、と、

の、峰、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

粗、の、腰、掛、と、い、ふ、は、

旋、所、松、枝、架、作、棚、

彼、海、棠、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

玉、の、除、け、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

山谷、徐、老、海、棠、案、上、と、い、ふ、は、

玉、の、除、け、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

有、海、棠、数、株、結、其、上、時、と、客、案、飲、其、間、又、玉、道、

人、祭、禪、四、方、帰、結、屋、と、海、峰、と、言、有、毛、人、と、其、

間、間、道、

玉、の、除、け、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

甲子、の、墓、と、い、ふ、は、甲子、の、墓、と、

学安實水の能書と

とて山居の旅探とさき思ふ高づくもなし
本居の梅窓紙の寄書平枕上の枕柳より
雪をりけり人をも知り或は雪をみさる
男も入る様子の稲を喰ひり一宛の豆畑通
ふはあす知ぬ農漢の足山陽の山は

中吾雜詠集

野人載酒来 農漢の己夕

吉又前集
二アリ

夜半静の月を待ては新雪の白く可きとき

國面を思ひおこす

一古は 水雪の底湖上月

國面新造之族居るは是北待彼之念也

かくはとていたるは男婦を好山好水に遊ば
るゝ人なりけり 病者くもはる世をいひ人
心くもはる年月福くもはる 抄さるの科をさ
に或は時佐良 船倉の地とてやとては佛新
初室の向ふくもはる 便りもはる風をいひは
まはる馬もはるくもはる 雪くもはるのちくも
やるれは 終る 之能くもはるくもはる

跋之解

史記滑稽傳：酒器也。出口成章，詞不窮竭。

滑
執音
如酒吐
景
字景
与御音同

北比彼山寺偷衣朝市頂冠只任口慙物寫

漢室粗載鵲冠笑朝市金客粗偷衣感衆徒
洛下逸人凡非去來隨所遊學棋館竹窓
蹴等凌節斯有年屬_{コノコト}拙_ニ山集玩弄
多已自謂_○机_○腋_○白裘者也。絕超二字謂ノ字下
朕入

狐白裘齊孟嘗君於秦幸姬遁囚
名裘也天下無雙直千金

於是四方之陰友僮ミナクミス往來或千里寄書書中
皆有佳句日溫月隆各程嘉年然有日比
仲騷士不集錄者

索居而栖為跼通穴

あまのこを撫そふと文通部也
雪水のくそをいふ也

且尙旣俚婦人不琢磨者庶言細語
 為喜同志雖無其域至何棄其人乎哉
 旣老人倪若人初心之寄之同志也
 吾亦之習之極之於其也

果分四序為六卷故不遑廣搜他家文牋也

四序 四季也

維
晚
之
錄
四
稔
辛
未
仲
夏

余抵錫於洛陽

旅亭偶會北來吟
席見需記以支題
眉尾平接毫
不揣拙庶幾一表高張

詞海漁人云

字彙曰凡策書之年月必以維字發之
 旡時之古字也稔穀一熟之義也

王尤之曰大張一網四羅群英





